

当時の時代背景綿密に

関東大震災から100年の節目を迎えた今年、史上最悪の自然災害の混乱期に起こった、知られざる悲劇にフォーカスした本が刊行された。

福田村事件。震災発生から5日後、四国から千葉県東葛飾郡福田村（現・野田市）を訪れていた売薬行商人15人が福田村と隣の田中村（現・柏市）の自警団に暴行され、幼児、妊婦を含む9人が殺害される。

事件の引き金となったのは、震災後の社会不安から流布された「デマだ。朝鮮人が集団で暴動に来る」「井戸に毒を入れた」といった流言が飛び交い、関東各県で在郷軍人や地元民による自警団が組織される。多くの朝鮮人が殺害され、外見では見分けがつかない日本人や中国人も巻き込まれた。行商人一行は四国弁で言語不可解な点があるとの理由から、行商用の鑑札を持っていたにもかかわらず、恐怖と不安で平静を失った

群衆の手によって犠牲者となった。

本書では徹底したフィールドワークにより、当時の韓国併合を巡る独立運動や社会主義運動への政府による弾圧、行商人一行の出自に絡む差別など、タブーとされてきた事件の時代背景が貴重な資料と共に綿密に描かれる。大前提として、不当に奪われていい命はない。では、本来、善良な市井の人々がなぜ凶暴化したのかを考えると、ほの暗い既視感を覚えざるをえない。

東日本大震災後やコロナ禍でも根拠のないうわさが社会を分断し、ネット上の偽動画や臆測は、時に政治権力に利用され、匿名の群衆による個人攻撃も多く生み出している。

本書をモチーフに制作された劇映画も公開中で、メガホンを取った監督・森達也は巻末の寄稿にこう記す。「映画を撮りながら、自分ももしもその場にいたらと何度も想像した。殺される側ではない。殺す側にいる自分だ」と。誰もが被害者になり、加害者にもなりうる。正義と悪の境界はいかにも不確かだ。確実なこととは、何人も過去の事実から目を背けてはいけないということだろう。

（フリーライター・大沢玲子、枕崎市出身）

福田村事件

辻野弥生著（五月書房・2200円）



つじの・やよい 1941年、福岡県生まれ。千葉県在住。著書に「呉服屋のお康ちゃん奮戦一代記」など。